学位論文要旨

インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の対照研究

― 表現方法と展開パターンに着目して―

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　日本語教育学分野

D192204　　MUTIA KUSUMAWATI

I.　論文題目

インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の対照研究
－ 表現方法と展開パターンに着目して－

II.　論文の構成（目次）

第 1 章　序論
1.1　研究背景と目的
1.2　本論文の構成
第 2 章　先行研究
2.1　「ほめ」の定義と特徴
2.1.1　「ほめ」の定義
2.1.2　「ほめ」の種類
2.1.3　初対面会話における「ほめ」
2.2　「ほめ」と「返答」の表現方法
2.2.1　「ほめ–返答」とフェイス侵害行為
2.2.2　インドネシア語と日本語における「ほめ」の表現方法
2.2.3　「返答」の表現方法
2.3　「ほめ」の展開パターン
2.3.1　「ほめ」の連鎖
2.3.2　ターンの有無から見た「ほめ」
2.3.3　「ほめ」の意図と機能
2.4　先行研究に残された課題
第 3 章　分析資料
3.1　調査対象者
3.2　データ収集の手続き
3.3　コーディング
3.3.1　話題区分
3.3.2　「ほめ」と「返答」の認定
3.3.3　「ほめ」と話題の分類
3.3.4　コーディングの信頼性
3.4　分析対象
第 4 章　「ほめ」と「返答」の表現方法
4.1　分析方法
4.2　「対者ほめ」の表現方法

4.2.1　インドネシア語の談話における「対者ほめ」
4.2.2　日本語の談話における「対者ほめ」
4.3　「返答」の表現方法
4.3.1　インドネシア語の談話における「返答」の表現方法
4.3.2　日本語の談話における「返答」
4.4　「第三者ほめ」の表現方法
4.4.1　インドネシア語の談話における「第三者ほめ」
4.4.2　日本語の談話における「第三者ほめ」
4.5　結果のまとめと考察
4.5.1　対者ほめ
4.5.2　返答
4.5.3　第三者ほめ
第 5 章　「対者ほめ」の展開パターン
5.1　分析方法
5.2　「ほめ」の機能
5.3　「ほめ」の展開パターン
5.3.1　インドネシア語における「ほめ」の展開パターン
5.3.2　日本語における「ほめ」の展開パターン
5.4　結果のまとめと考察
第 6 章　「第三者ほめ」の展開パターン
6.1　分析方法
6.2　「第三者ほめ」の機能
6.3　「第三者ほめ」の展開パターン
6.3.1　インドネシア語における「ほめ」の展開パターン
6.3.2　日本語における「ほめ」の展開パターン
6.4　結果のまとめと考察
第 7 章　結論
7.1　まとめ
7.2　教育的示唆
7.3　今後の課題
参考文献

III. 論文要旨

第 1 章　序論

1.1　研究背景と目的

「ほめ」は相手のフェイスを脅かす場合に，フェイス侵害の度合を軽減する機能も持つ（Brown & Levinson，1987）。また，日本語の初対面会話では「ほめ」は重要な役割を担っていることが指摘されている。会話において「ほめ」を行う際，会話参加者はやりとりを行いながら「ほめ」を展開していく（熊取谷，1989；金，2004；2007；2012）。したがって，会話の中での「ほめ」の特緒を捉えるためには，会話参加者の相互作用を含む談話レベルで「ほめ」を捉える必要がある。

これまでの日本語における「ほめ」の研究では，一部の展開パターンが明らかにされたが，詳細な相互作用や展開については明らかにされていない。一方，インドネシア語においては，談話レベルで「ほめ」を扱った研究はない。以上をふまえ，本研究では「ほめ」の表現方法と展開パターンに着目し，インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2　本論文の構成

第 1 章では，本研究の背景と問題点を論じ，本研究の目的を述べる。第 2 章では，先行研究をまとめ,そこに残された問題点をふまえた上で,本研究の課題を提示する。第 3 章では，本研究で使用される分析資料を説明する。第 4 章では,「ほめ」と「返答」の特徴を明らかにする。第 5 章では「対者ほめ」，第 6 章では「第三者ほめ」の機能と展開パターンを明らかにする。第 7 章では，本研究の結果をまとめ，結論と今後の課題を述べる。

第 2 章　先行研究

2.1 「ほめ」の定義と特徴

2.1.1　「ほめ」の定義

先行研究における「ほめ」定義には「第三者ほめ」が含まれていない。しかし，初対面会話において「第三者ほめ」は重要な役割を担うと指摘されている。以上をふまえ，本研究では,「ほめ」を「おくり手がある対象に対して直接的あるいは間接的に肯定的な評価をくだし，その対象の価値を上げようとする言語行動」と定義する。

2.1.2　「ほめ」の種類

古川（2000；2002）では,「ほめ」の対象として，話し相手に対する「対者ほめ」の

みならず，第三者に対する「第三者ほめ」も含まれている。

2.1.3 初対面会話における「ほめ」

日本語の初対面会話において「ほめ」は重要な役割を担っていると指摘されたが，初対面会話に関して行われてきた従来の「ほめ」の研究は，日本語における研究であり，他の言語にも類似の特徴が見られるかについては不明である。

2.2　「ほめ」と「返答」の表現方法

2.2.1　「ほめ―返答」とフェイス侵害行為

「ほめ」は相手への要求を間接的に伝える可能性があり，相手のネガティブ・フェイスを脅かす恐れがある（Brown & Levinson, 1987）。Holmes（1989）によれば，「ほめ」を行う際，相手に「返答しなければならない」という負担を与える。「ほめ」と「返答」の表現を同時に見ることで，当該言語における「ほめ」の実態がより明らかになると考えられる。

2.2.2　インドネシア語と日本語における「ほめ」の表現方法

両言語には相違点が見られる可能性があるが，初対面会話における「ほめ」の表現方法の特徴や使用傾向についてはまだ明らかにされていない。

2.2.3　「返答」の表現方法

両言語に相違点が見られる可能性がある。また，先行研究では「ほめ」と「返答」を隣接ペアとして分析されてきたが，これまでの研究の分析対象は一つの隣接ペアにとどまっている。

2.3　「ほめ」の展開パターン

2.3.1　「ほめ」の連鎖

先行研究では，「ほめ」に関するやり取りを「先行連鎖」，「本連鎖」，「後続連鎖」の三つの段階に分けられている。しかし，日本語の初対面会話における「ほめ」の連鎖は部分的にしか明らかにされていない。また，インドネシア語では「ほめ」の展開パターンに関する研究は行われていない。

2.3.2　ターンの有無から見た「ほめ」

「ほめ」が行われる際には，ターンを取得して行われる「ほめ」（以降，「ターン有ほめ」）とターンを取得せずに行われる「ほめ」（以降，「ターン無ほめ」）がある（Goodwin,

1986；吉田他，2009)。これらの存在については従来言及されてきたが，「ほめ」の機能という観点から，「ターン有ほめ」とどのように異なるのかについての分析は行われていない。

2.3.3 「ほめ」の意図と機能

「ほめ」が談話中のどこで用いられ，どのようなパターンを構築するかは，「ほめ」の意図や機能と密接に関わる。

2.4 先行研究に残された課題

以上をふまえ，本研究の研究課題およびそれぞれの研究課題を明らかにするための観点は以下の通りである。

研究課題 1　インドネシア語と日本語の初対面会話において，「ほめ」と「返答」はどのような表現方法で行われるか。（第 4 章）

研究課題 2　インドネシア語と日本語の初対面会話において，「対者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。（第 5 章）

研究課題 3　インドネシア語と日本語の初対面会話において，「第三者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。（第 6 章）

第 3 章　分析資料

3.1 調査対象者

本研究の対象者はインドネシア語母語話者と日本語母語話者の大学院生，それぞれ 10 組（女性 5 組，男性 5 組）である。対象者は初対面，同年代，同性同士に統一した。

3.2 データ収集の手続き

調査対象者に調査の概要を説明した後に，自己紹介を伴った 30 分程度の自由会話をするように指示をした。予備調査で「ほめ」が見られることを確認した上で本調査を行った。すべての会話は録音され，文字化された。

3.3　コーディング

3.3.1　話題区分

本研究では「話題」を単位としてその中に見られる「ほめ」を分析する。詳細に見取るため，本研究では，筒井（2012）に基づいて話題を小レベルで区分する。

3.3.2　「ほめ」と「返答」の認定

「ほめ」の認定は，本研究における定義や先行研究で述べられている「ほめ」と「返答」の表現方法に基づいて行なった。

3.3.3　「ほめ」と話題の分類

会話における話題区分にもとづいて,「ほめ」が生起した話題を「対者」と「第三者」に分類した。

3.3.4　コーディングの信頼性

コーディングの信頼性を確認するために，筆者とそれぞれの言語を母語とする第二認定者がコーディングを行った。コーディングの一致率はいずれも 0.90 以上であり，信頼性が確認された。

3.4　分析対象

コーディングされた資料から抽出した「ほめ」,「返答」や本資料中で「ほめ」が出現した話題を分析対象とする。

第 4 章　「ほめ」と「返答」の表現方法

4.1　分析方法

まず,「対者ほめ」と「第三者ほめ」をそれぞれ「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」に分類する。次に，談話資料中に見られた「ほめ」と「返答」の表現を分類する。その上で,「ほめ」の表現や「ほめ」の対象がどのように「返答」の表現と関わるか，また談話が展開するにつれて「ほめ」と「返答」の表現方法が異なるかを分析する。最後に，分析結果をふまえ，ターンの有無の観点から考察を行い，両言語における類似点と相違点を明らかにする。

4.2　「対者ほめ」の表現方法

両言語ともに「評価」が最も多く見られるが，日本語の方が多い。また，インドネシア語においては,「事実指摘」の割合も日本語に比べて高く，インドネシア語では日本語に見られない「神様への言及」も観察された。

4.2.1 インドネシア語の談話における「対者ほめ」

インドネシア語では,「評価」という「ほめ」は「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」の両方に使用されている。また,「事実指摘」は「ターン無ほめ」では見られず，一つの話題において 1 回のみ見られた。日本語に見られない「神様への言及」という表現方法は，談話レベルで観察すると，単独で用いられることはなく,「評価」など他の表現とともに現れることが分かった。さらに，相手がターンを取っている途中に「感動詞のみ」で「ほめ」が表される例はインドネシア語に特徴的に見られた。

4.2.2 日本語の談話における「対者ほめ」

日本語において，使用割合が最も高い「評価」は「ターン有ほめ」にも「ターン無ほめ」にも見られる。また，一つのターンに「ほめ」が複数回行われる例はインドネシア語には見られなかった。

4.3 「返答」の表現方法

ここでの「返答」はすべて「対者ほめ」に対する「返答」である。インドネシア語では「回避」が多く使用されているのに対して，日本語では「肯定」が多く使用されている。

4.3.1 インドネシア語の談話における「返答」の表現方法

インドネシア語では,「神様への言及」の「ほめ」に関して,「人」である自分が肯定するのも否定するのもはばかられるため,「回避」の表現が取られると考えられる。本談話資料では「神様への言及」の「ほめ」が 6 例見られたが，それに対する「返答」の 5 例が「回避」であった。

4.3.2 日本語の談話における「返答」

日本語では「肯定」の表現が最も多く使用されている。「肯定」の「返答」において，ほめられる側が自ら「ほめ」対象の価値を上げるという談話展開が見られる。このような例はインドネシア語では見られない。

4.4 「第三者ほめ」の表現方法

両言語ともに「評価」の使用割合が最も高い。日本語に関しては「評価」の偏りが顕著であることが両者を比較することで明らかになった。一方,インドネシア語では,「対者ほめ」で見られた「事実指摘」や「神様への言及」が「ターン有第三者ほめ」で見られることは少なく，特に「神様への言及」は 1 例も見られない。「ターン無第三者ほめ」が行われることは極めて少ない。また,「評価」と「感動詞のみ」の表現が使

用されている。

4.4.1 インドネシア語の談話における「第三者ほめ」

インドネシア語では,「評価」を用いて第三者をほめる際に，相手が用いた表現を言い換える形でほめ合いが行われている。

4.4.2 日本語の談話における「第三者ほめ」

第三者を「評価」でほめる際，同じ表現が繰り返されるのではなく，類似の評価が相互に用いられることで「ほめ」の対象の価値が上げられていることが日本語でも確認された。

第 5 章　「対者ほめ」の展開パターン

5.1　分析方法

まず，談話のデータから「対者ほめ」が含まれる話題を抽出し,「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」に分類する。次に，それぞれの「対者ほめ」がどのような機能を有するかを分析する。機能の割合を算出し，そこから現れた特徴的な部分に着目し，その話題を「先行連鎖」,「本連鎖」,「後続連鎖」に分ける。

その後，それぞれの連鎖に現れる展開パターンを分類するとともに，そこから現れた特徴的な部分に着目し，談話例をもとに分析する。最後に，それぞれの言語において「ほめ」はどのような時に，どのようなパターンで展開されるかを明らかにした上で,「ほめ」の機能の観点から考察を行う。

5.2　「ほめ」の機能

インドネシア語においても日本語においても「興味提示」としての「形式ほめ」が多く見られることがわかった。ただし，インドネシア語の「対者ほめ」では「実質ほめ」も使用されるのに対して，日本語の「対者ほめ」では「形式ほめ」が使用されることが明らかになった。

5.3　「ほめ」の展開パターン

5.3.1 インドネシア語における「ほめ」の展開パターン

「興味提示」としての「ほめ」では,「先行連鎖」の役割は相手に関する情報を得ることである。「本連鎖」では,「ターン有ほめ」が多く，ほめ手が積極的に話題を維持する意図を持っている際に活用される。「後続連鎖」では，ほめ手による場合も，受け

手による場合もある。

「肯定評価」としての「ほめ」に関して,「先行連鎖」では,「ほめ」の前に，他の対象と比較することで，当該の対象が評価される。その後,「ほめ」に対する「返答」が行われ,「ほめ–返答」という「本連鎖」が構築されるが,「返答」を行った受け手はターンを保持し,「後続連鎖」では「ほめ」の対象に関する情報を追加している。

5.3.2 日本語における「ほめ」の展開パターン

「興味提示」としての「ほめ」の役割は相手に関する情報を得ることである。「本連鎖」に関して,「連続ほめ」のパターンでは,「ほめ」は 1 回以上行われるが，受け手は「ほめ」に対して「返答」をせず，発話内容を続ける。ここでは,「ターン有ほめ」だけでなく,「ターン無ほめ」も多い。「ターン無ほめ」は受け手のターンを妨げることなく，関心を持っていることを示す際に活用される。その後の「後続連鎖」は受け手によって行われることが多い。「連続ほめ–返答」のパターンでは,「ほめ」の後に，受け手が「返答」を行った後，ほめ手によって「後続連鎖」が行われることが多い。

第 6 章　「第三者ほめ」の展開パターン

6.1　分析方法

まず，談話のデータから「第三者ほめ」が含まれる話題を抽出し,「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」に分類する。次に，それぞれの「ほめ」がどのような機能を有するかを分析する。機能の割合を算出し，特徴的な部分に着目し，その話題を「先行連鎖」,「本連鎖」,「後続連鎖」に分ける。

その後，それぞれの連鎖に現れる展開パターンを分類するとともに，そこで見られた特徴的な部分に着目し，談話例をもとに分析する。最後に，それぞれの言語において「ほめ」はどのような時に，どのようなパターンで展開されるかを明らかにした上で,「ほめ」の機能の観点から考察を行う。

6.2　「第三者ほめ」の機能

インドネシア語で使用割合が最も高い機能は「自己フェイスの維持」であるのに対して，日本語では「興味提示」における「話題維持–あいづち」である。また，両言語ともに「興味提示」の「話題維持」が二番目に多く見られる。これらの「ほめ」の展開パターンを分析する。

6.3　「第三者ほめ」の展開パターン

6.3.1 インドネシア語における「ほめ」の展開パターン

「自己フェイスの維持」としての「ほめ」では,「先行連鎖」でマイナス評価が含まれる。自らのフェイスを維持するために,「本連鎖」で「ほめ」が行われる。「後続連鎖」においても，ほめ手が責任を軽減しながら自分の意見を述べるという展開パターンが見られる。

「話題維持」としての「ほめ」では,「先行連鎖」で相手と共通の話題が導入される。「本連鎖」では,「第三者ほめ」を行うことで，ほめ手はお互いに当該の話題に関する興味や知識を持つことが示される。「後続連鎖」では,追加のコメントが提示される等,当該の話題が維持されることになる。

6.3.2 日本語における「ほめ」の展開パターン

「話題維持–評価的応答」では，全ての話題に「先行連鎖」が見られ，その役割は相手と共通する話題を導入し,会話を展開することであると考えられる。「本連鎖」では,情報量が多い話者は,「ターン有ほめ」を行い，話題を維持する。一方，情報量が少ない話者は，相手の話を聞きながら,「ターン無ほめ」を行うことで，興味を持っていることが示される。「後続連鎖」では，最初のほめ手によるものと，後者のほめ手によるものが観察された。

「話題維持」としての「ほめ」では,「先行連鎖」の役割は相手と共通する話題を導入し，会話を展開することである。「本連鎖」では,「ほめ」によって共通点が確認されることで，当該の話題が維持される。「後続連鎖」では，追加情報によって当該話題が維持されている。

第 7 章　結論

7.1　まとめ

本研究の結果から,「ほめ」と「返答」の負担度が大きいため，自己主張を回避するために,「ほめ」は間接的な表現で行われ，本連鎖では「単独ほめ」や「単独ほめ–返答」のパターンが見られやすいと考えられる。それに対して，日本語では,「ほめ」は受け手に対する「共感」を伝えるために活用され，インドネシア語に比べて，ほめられたことによる相手の負担度が大きくないと言えよう。ここから,日本語における「ほめ」は直接的な表現で多く行われるほか,「肯定」の「返答」が見られやすい。また,本連鎖では,「連続ほめ」や「連続ほめ–返答」など「ほめ」が複数現れるパターンが見られやすいと考えられる。

7.2　教育的示唆

本研究では，インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の表現方法と展開パターンの特徴が明らかになった。両言語には相違点が見られたことから，インドネシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面において，「ほめ」の使用の違いによって，不快感や違和感が生じる恐れがある。そのため，円滑なコミュニケーションを行うためには，日本語教育現場において，本研究で明らかになったようなインドネシア語と日本語の違いをふまえた指導が行われることが求められる。

7.3　今後の課題

まず，会話における「ほめ」のあり方を明らかにするには，それぞれの要因をさらに詳細に検討する必要がある。また，「第三者ほめ」はさらに５つに分類されるが，それぞれの分類における相違点についても考察する余地がある。最後に，日本語教育現場における指導を考えるためにも，接触場面における実際の会話データを用いて，日本語母語話者と日本語学習者の特徴を見る必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

金庚芥（2004）日本語の「ほめの談話」に関する一考察『桜美林国際学論集 Magis』9，77-91.

金庚芥（2007）日本語と韓国語の「ほめの談話」『社会言語科学』10（1），18-32.

金庚芥（2012）『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房.

熊取谷哲夫（1989）日本語における誉めの表現形式と談話構造『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2，97-108.

筒井佐代（2012）『談話の構造分析』くろしお出版.

古川由理子（2000）「ほめ」の条件に関する一考察『日本語・日本文化研究』10, 117-130.

古川由理子（2002）「ほめ」の種類－受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に」『日本語・日本文化研究』12，41-54.

吉田奈央，高梨克也，伝康晴（2009）対話におけるあいづち表現の認定とその問題点について『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』430-433.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.

Goodwin, Charles. (1986). Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies*, 9, 205-217.

Holmes, J. (1988). Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.